白刃鬼　弥

創離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白刃鬼　弥

【Ｎコード】
Ｎ５４０５Ｖ

【作者名】
創離

【あらすじ】
前作までを読んでください

「語りましょう、と言っても教授が知りたいのは要約された事実だけでしょうからあまり長々と話すつもりはありません。
さて」
綺羅々がお茶をすすり体勢を変えた。
「私と先輩の関係は、先ほど言ったように『剣の師匠と弟子』
そんなところでしょうか」
「剣？」
「えぇ。先輩の通っていた居合の道場、そこに私が通い始めました。
そうして、だんだん仲良くなっていって、先輩の家は剣術家の家系みたいなこと言ってましたか……
まぁ、居合とは別に先輩から直接剣を教わっていたんですよ」
花山は特に驚いた様子もなくお茶をすする。
「まぁ、関係はそれだけでした。次に」
「まて、その前に」
話を花山が遮った。
「井上美月……失踪時年齢十八
星屑綺羅々……美月失踪時年齢十九
お前、美月より年上なんじゃないか？」
「？　そうですよ。それがどうかしましたか？」
花山は飽きた様に溜息をつき、質問を口にした。
「何で、お前が美月を先輩扱いしてるんだ？」
「あ、あぁ！　そうですね、いつもの癖でつい」
綺羅々は頭をかきながらほほ笑む。
「道場に行った時のことですよ。
先輩なんか一人みんなとは違う雰囲気をかもしだしてて、綺麗な黒髪が良く似合ってて、今まであった女子の中でも一、二を争う位可愛いと言うか綺麗と言うか……

そんな感じで、最初に年上と間違えて先輩って呼んでしまったんですよ。
以後、誤解は解けたものの二人してお互いを『先輩』って呼んでます」
綺羅々はなぜか胸を張って誇らしげに言った。
「なるほどな。なんと言うか、馬鹿丸出しだな」
「う、良いじゃないですか。教授はあの美貌を見た事がないからそんなこと言えるんですよ」
「分かった分かった」
花山はなだめるように手で綺羅々を抑える。
「で、そんな憧れの先輩をどうして追っているんだ。
世間一般では、死んだ。
と、なっている筈だが」
花山の鋭い視線が綺羅々に向かう。
「……えぇ、お話しますよ。もちろん。
それに、話を遮ったのは教授ですよ」
そして、そう言う視線には耐性があるのか、綺羅々もそれを笑って受け流した。
「そうですねぇ、そっちの方も寝てらっしゃいますし、これを見てもらうのが早いですか」
そう言って、綺羅々はおもむろに服を脱ぎ始めた。
「……？！」
花山はその姿に絶句する。
「これが理由です」
無数の、という訳ではない。
右腕に数本、背中に大きく一本、左肩から肘にかけて一本。
そこには”刀傷”が刻まれていた。
「もう、一カ月位前ですか。
私は趣味で刀を見に行ってました」
綺羅々は、服を着ながら橘の経営する会社の系列店の名前を告げ

た。
「橘さんの店でしたし、そのころは食い入るように刀を見てました。
それこそ、人を斬ってみたいと思う程にね」
綺羅々の顔がいびつに歪む。
「そうして、新しく入った刀を見せてもらっていたんです。橘さんの先輩って言えば大抵の事は通りましたから。
そうして気付けば時刻は夜十一時、店も閉じる時間です。
私は電車にも遅れそうだったので、たまにしか使わない裏道なんて使ったんです」

―――

「ヤバい！　電車間に合うかな」
綺羅々は夜の街の裏を駆けていた。
「つーか、明日大学なんか用事があった様な……」
思い出せない、と言う理由から自然少し目を閉じた。
その時、駅に行く道とは違う道に入った。
（あれ？　なんだっけ？）
そうして気付くと、そこには町の光も音も届かないほど奥に入り込んでいた。
「あぁ、明日も大学あるのにー。さっきの道を間違えたかな」
綺羅々は道を戻ろうとする。
が、その脚を止めた。
（あれ？　この音）
夜の裏道に響く音、それは昔何度か聞いたことのある音だった。
「なつかしいな、昔は先輩とよく手合わせしたっけ」
昔の事を思い出しながら、自然と足が音のする方向へと向かっていた。
（あれ？　でも、どうしてこんな所でこの音が聞こえるんだろ
それに、なんだろう。この感じ。
なんだか、違う。けど、同じに感じる）

曲がり角を曲がり、そこにあるモノを綺羅々は最初理解できなかった。
（え？　何、これ）
それは、闘いだった。鉄パイプやナイフで武装した男たち、それを相手にたった一人が切り刻んでいた。
男たちの奥には一人、スーツを着た男が立っていた。
「な、何なんだよ！　こいつは！」
「高橋さん、俺たち聞いてないっすよ！」
「相手にするのは町のチンピラとかじゃなかったんですか？！」
男たちのほとんどは、もうすでに逃げ始めていた。
「ひぃ！　お、お前ら！　何してるんだ！
わ、私を護れぇ！」
高橋と呼ばれた男はみっともなく地べたを這いまわる。
「高橋　いさむ……死刑」
青白く光る日本刀は、赤い液体を垂らしながら高橋の頭に振り下ろされる。
「ひ、」
綺羅々の視界は赤一色になった。
「で、誰？」
「聞き覚えのある声」
「？」
日本刀持った人間は、マフラーと光の無さで男か女かも判別できなかった。
「普通の日本刀にしては、ずいぶんと色が違うみたいですけど」
「……満月とはいえ、この暗い中分かるの？」
「うん、ずっと見てたからね
それに、その太刀筋も」
綺羅々は竹刀袋から木刀をとりだす。
「何してるんですか？　先輩」
「？！　……もしかして、先輩ですか？」

マフラーが風になびいて、ずれる。
「先輩の髪、昔は綺麗だったのに……もうそんな事も気にしないんですね」
「……私は、白刃鬼だから」
綺羅々が木刀を構える。
「木刀で……そうでなくても私に勝てると思ってるんだ」
美月は哀しそうに声を出す。
「あの頃だって、勝てなかった訳じゃない」
綺羅々は血だまりの中を歩き、美月に近づいて行った。

―――

「……その後は、語るだけ野暮ですよ」
綺羅々は満足そうに呟く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5405v/

白刃鬼　弥

2011年8月6日03時17分発行